ファーベルとミティディカ

——仲介者 (Vermittler*in*) としてのロマン的ポエジーもしくはポエジーの形姿——

林　　真　帆

ブレンターノ総告解の後，1817年秋に発表された『たくさんのヴェーミュラーとハンガリー人の顔』は，この時期としては珍しく，カプリツィオ風の娯楽的作品 Erzählung である。本発表ではこの作品をブレンターノの作品史・精神史に位置づける試みとして，ノヴァーリス『クリングゾーアのメールヒェン』と比較した。例えば同じように3つの枠内物語が語られるが，『ヴェーミュラー』のそれは枠物語の混乱状態を収拾してロマン的ポエジーの世界を実現する「ロマン化機能」の強力なイニシアティヴを有してはいない。こうした「機能不全」は進行役・ジプシーの少女ミティディカの役回りにも表れており，彼女はフランス貴族の恋人に永遠の誠実を誓い乍ら，彼の許へゆこうとはしない (「ロマン的結婚」の拒否)。また，ミティディカやヴェーミュラーの妻は，道中の安全のために男装していったんは自分の性を否定しなければ，愛する者との間を隔てるペスト封鎖線を越えることができないのである。こうして，『ヴェーミュラー』におけるさまざまな対立項は揚棄されず，結末部の宴の場面は，『クリングゾーア』のようなユートピア的祝祭とはならないまま枠物語の枠を越えて続いていく。

しかし枠物語・ブレンターノの実人生，枠内物語・『ヴェーミュラー』という構造を想定すると，「有用性文学」の時代における「ポエジーの無効性」を描いたかのようなこの作品は，いささか違った相貌を見せてくる。キリスト教的な脚色，改作をしないまま発表したばかりか，彼はよく『ヴェーミュラー』を好んでサロンで朗読した。死の前年には若い頃の友人らと音楽，バレー付の朗読劇じたてで上演，その様子を友人の画家がスケッチし，さらに詩人は女流画家の恋人に手紙で報告するという，きわめて「ロマン的」な「演出」さえ行なっている。

このような視点からみると，作品中のミティディカの拒絶，ポエジーの「機能不全」はその「無効性」ではなく，貴族の領地や「修道院の壁」に囲いこまれること——時代の要請に屈服することに対する拒否，ロマン的ポエジー，詩人の「自律性」の新たな宣言(マニフェスト)ではないかと思われる。総告解あるいはデュルメン時代という詩人の実生活における「封鎖線」の意味を問い直そうとする近年のブレンターノ研究の立場からも，こうした解釈は充分妥当性をもち得るだろう。